



災害と古事記

前号で紹介した小松和彦編『進化する妖怪文化研究』（せりか書房、2017）は、想像力を刺激してくれる論文が多く収録されていて面白い。民俗学や社会学、比較文化学などに興味を持っている人は、手にとって見ることを勧めておく。（図書室に入れてもらった）

さて、最近、日本列島は大地震や集中豪雨に見舞われ、大きな被害を被っているが、その際、例えば三陸海岸の「（津波）てんでんこ」ではないが、災害を受けた土地に、古くから災害に関する言い伝えがあったことがニュースで伝えられたりすることがある。そんな例が『進化する～』の論の中にも紹介されている。引用してみよう。

*

2014年の8月の集中豪雨は、広島市宇佐南区八木地区で、多くの犠牲者・被害（死者74名、家屋の全壊174戸、半壊187戸）が出た。土地の伝承によれば、被害にあった地域は、もともとは「蛇落地悪谷」と呼ばれ、大雨が降れば水が出るので、人が住むことを避けてきた地域であった。また、この地域には、中世の在地武将による悪蛇退治の伝承も語り伝えられていた。災害報道ではしきりにこの伝承が取り上げられていたが、こうした伝承があるにもかかわらず、行政や住宅開発業者は、そのことを知ってか知らずか、住宅開発を進めた結果、今回のような悲惨な事態になったのであった。

同じ年の7月には、長野県南木曾町の梨子沢で台風8号による豪雨で土石流が起り、死者1名、全壊家屋10戸の被害をもたらした。被害が少なかったことや、その後も山口県岩国市（8月6日）、兵庫県丹波市（8月

17日）、上述の広島市の土砂災害が続いたこともあって、それほど注目されなかったが、一連の報道のなかで、やはり山崩れ・土石流災害に関する土地の伝承が取り上げられていた。この地域では、山崩れ・土石流（山津波）のことを「蛇抜け」と呼ぶ。（以下略）

*

この例は、民間伝承を知ることが防災にも役立つことを伝えている。自然の猛威に対応することはできないが、伝承された知恵を生かすことで、少しでも被害を減らすことができるからである。詳しくは、直接読んでほしいと思うが、私は別の点でこの話に興味を引かれるのである。それは、洪水や土石流（山津波）が「蛇」のイメージで伝承されているという点なのである。

私が何をイメージするかというと、『古事記』に語られた「八岐大蛇」の話である。これは、毎年姿を現しては村人に生け贄の娘を要求する八岐大蛇を、素戔鳴尊が酒を飲ませて退治する話である。実はこの話、登場人物の名前、例えば、生け贄の娘が「櫛稲田姫」と言われていることに注目すると、「櫛＝くし＝素晴らしい」、「稲田＝稲が実った田」ということで、毎年「八岐大蛇」が、せっかく実った田に襲いかかる物語と考えることができるのである。とすると、八岐大蛇が象徴しているものが、川の氾濫なのではないかと想像されることになる。つまり、「大蛇＝川の氾濫」なのである。

山の多い日本では、川は氾濫しやすかった。それを蛇に象徴させて、伝承してきたのである。その最初が『古事記』の話なのである。